

午前三時

照明の消えたホテルのロビーは深い水の底のようでもある。フロントのまわりだけが天井から吊された橙色の明かりに照らされ、浮島のように浮かび上がる。

その小さな島の端で、フロント係の若い男が、カウンターの内側の小さなデジタル時計に目を落とす。午前二時五十分。仮眠休憩の時間が近いが、眠くはない。

彼はここ五年間ほどまともに眠っていない。眠くならないものだから、眠ろうにも眠れない。夜勤の仕事をするのにうつつけというわけだ。こ

落としている。

フロント係も何も言わない。婦人の手の甲は乾燥していて、細かなしわがいくつも寄っている。

夢で見たとおりに、富くじが大当たりしたの。

婦人は言う。顔を上げる。若くはない。婦人は彼を見る。一瞬、瞳が強く光り、彼を驚かせる。カウンターのの上に吊された明かりのせいだろう。彼は驚きを表情に出さず、微笑を保つ。

婦人は視線を落とし、語り始める。毎年一枚ずつ富くじを買う習慣があるのだそうだ。それまで当たることはなかったが、ある年、ある朝、当たる夢を見た。

のようになったのはちょうど大学を中退する直前だったが、それについては別に理由があり、不眠のためではない。また体調にしても何ともないの

で、彼は眠れないこと自体は気にしていない。遠くからかすかに短いチャイムの音が伝わってくる。エレベーターだ。扉が開く物音は聞こえないが、その様子は目の前で見ているように思い浮かぶ。彼はロビーの奥の暗闇に目を向ける。

一人の婦人が現れ、近づいてくる。フロント係は静かな笑みを浮かべる。

婦人はカウンターの上に握った手を置く。手に握られたアクリルの棒きれに橙色の光が入り込む。部屋の鍵の札だ。

婦人は手を開かない。握ったままの手に視線を

富くじを両手に掲げて踊り回った。気がつく、すばらしく明るい場所にいた。身なりの立派な銀行の支配人が歩み出て、握手をした。銀行で、表通りで、あらゆる人々に祝福された。太陽も鳥も祝福するようだった。すべてが自分のために存在していた。息を飲むような夢だった。

果たして、その年の富くじは大当たりだった。それは良かったです。フロント係は相槌を打つ。深夜にふさわしい静かな微笑を絶やさない。信じられないような大当たりだったの。婦人は言う。

さようで。ところで今夜はこれからお出かけですか。フロント係は問う。

婦人はすこし考え、答える。眠れなかったから

そうしようと思っただけど、やっぱりよすわ。

婦人は鍵札を握ったまま、手を引き戻す。

良い夢を。フロント係は言う。

婦人はゆっくりと引き返す。フロント係はその足元を注視する。婦人が手に提げたハンドバッグを軽く振りながら歩く様子を、それからロビーの奥の暗がりにも紛れる様子を見送る。

やがてエレベーターの駆動音がかすかに伝わってくる。彼は緊張を解く。午前三時。彼は眠気を感しない。

彼の背後の扉が開き、同僚の男が出てくる。彼と同年代の背の低い男だ。扉の向こうは事務室で、同僚の男は一時間の仮眠休憩を終えたところだ。

ずいぶん長いこと話していたじゃないか。同僚

彼は事務室の古いソファに座り、やがて横になる。だが眠らない。机の上の明かりだけをつけて、天井に映るふしぎな形の影を見続ける。

鉱山に行つて、花を植える夢を見たの。

婦人は次の夜も同じ時刻に現れ、彼に語る。彼は深夜のフロント係らしく静かな微笑を絶やさずにいる。

婦人の話によると、婦人は夢の中で、盛大な結婚パーティを催していたのだそうだ。丘の上の大きな屋敷に大勢の客を集めて。

パーティのちょうど半分のところ、婦人は屋敷を裏口から抜け出した。裏庭にはほとんど見知

は言う。彼は気のない返事をする。

口説いていたのか？

まさか。

じゃあ口説かれていた？

彼は軽い悪態を残して事務室に下がる。婦人の話は嘘だろうと思う。富くじが当たったことも、外出するつもりだったということも。

信じられないような財産があるならば、こんなさびれた町に滞在することはないだろう。

外出するつもりならばスリッパで下りてきたりはしないだろう。

そして、それらのうちどちらか一方が嘘であるならば、他方も嘘であるように思われる。彼はその辺りで考えを打ち切る。

らぬ女の一団がいた。手に手に花を持っていた。

婦人も手に一輪の白い花を持っていた。女たちはひとかたまりになって、だれも口をきかず、肅々と丘を下り、歩いた。森に入り、歩き続けた。森が途切れ、鉱山に出た。離れたところから男の声がか聞こえた。遠くで爆発音が聞こえた。女の一人が、婦人に、ダイナマイトの音だと説明した。

女たちの一団は捨てられた坑道の入り口に至った。みんな地面にうずくまっていた。それぞれ手で土を掘り、花を置き、土を戻し、根元に両手をあてがっていた。婦人はほんの少しの間ためらったが、すぐにほかの女たちと同じようにした。

果たして、結婚する予定だった男が鉱山の事故のために他界したのだと婦人は語る。

それは残念です。フロント係は答える。

婦人は何も答えずフロントを離れ、誰もいないロビーへ、さらにその奥の暗がりへと消えていく。エレベーターの動く音が聞こえなくなると、彼は背後のドアを開け、同僚の男を蹴って起こし、休憩を交代する。

彼は古いソファに座り込む。婦人の話は信じない。昨夜の話が嘘なら今夜もどうせ嘘に決まっている、五年前のその鉱山事故で父と兄を亡くした彼はそう考える。趣味の悪い嘘だと、事故のあと大学を中退してホテルに勤め始めた彼は考える。彼はソファの上で横になり、しかし眠らず、天井を見続ける。

婦人はそこまで語ると、カウンターに肘をつく。頬杖をついて彼を見上げる。

果たして？ 彼は問う。

さあ。婦人は答える。今朝見たばかりの夢だから。

婦人はカウンターを離れる。

良い夢を。フロント係は静かに声をかける。ありがたい。婦人はすこし離れたところから声をかける。ロビーの奥の暗がり消える。フロント係は手元の小さなデジタル時計に目をやる。午前三時。

エレベーターの音が聞こえなくなる。彼は息をつく。話がすぐに終わって良かったと思う。

内線電話のベルが鳴る。彼は受話器を手に取っ

月が落ちてきたの。

さらに次の夜も、婦人は同じ時刻に現れる。フロント係は苛立つが、職業上の習性から、それを微笑の裏に隠してしまう。

婦人の話によると、地上に月が落ちてきたのだという。視界をすっかり覆うほどに大きかったが、それでもはるか遠くにあり、とてもゆっくり降下した。そして地平線の向こうに落下した。衝撃波が来るので、町の人々は一斉に逃げ始めた。婦人も逃げようとした。丘の向こうまで行けば陰になつて助かるかもしれない、そう考えた。だが丘に向かう道という道に人があふれていて、身動きが取れなかった。

て耳にあてがう。

先ほどの婦人の、先ほどと同じ調子の声だ。

生まれそうな、タクシーを呼んで。

彼はエレベーターに乗り込む。扉を閉め、五階のボタンを続けざまに三度押す。彼は怒りを感じている。いい加減にしろよ、そう思う。生まれるって、一体何がだ。たちの悪いいたづらを、どう言つてやめさせようか考える。いつそ怒鳴りつけてやろうとも考える。

扉が開く。すぐそこで婦人が膝をついていて、彼は危うくつまずきそうになる。危ないじゃないか、彼は声に出す。

婦人は体を起こして彼を見る。婦人の陰にもう一人女性が座り込んでいる。堅く目を閉じ、額に汗を浮かべ、息が荒い。切ない悲鳴を短く漏らす。くり返し漏らす。婦人は妊婦の手を握る。

部屋に戻ろうとしていたら、この人がいたのよ。急に陣痛が来て驚いちゃったみたいね。婦人は落ち着いている。タクシーは？

彼は気の抜けた返事をして、エレベーターの扉の脇にある電話機に手を伸ばす。受話器を上げ、外線にする。

その、と彼は小さな声で言う。タクシーでよろしいのでしょうか、救急車でなく。

婦人は彼に目を向けもせず、ハンドバッグを開く。中から何かを取り出して妊婦の手に握らせる。

富くじだ。婦人は優しく声をかける。

大丈夫よ。

ホテルの表でタクシーを見送り、婦人はあくびをする。

彼は婦人に、鉱山の夢の話が本当なのかを問う。婦人はうなずく。それから、彼の兄の名前を口にする。彼は何も言わない。婦人は、彼が彼の兄とよく似ていると言う。彼は何も言わない。ここで会うとは思わなかったが一目で分かったと婦人は言う。

二人はエントランスを抜ける。婦人は彼に毎晩眠れているか尋ねる。彼は眠れていると嘘をつく。

二人はフロントの前で立ち止まる。

自分も富くじを買ってみようかと彼は口に出す。

婦人は短く笑う。良い夢を。そう言い残し、フロントを離れる。ロビーの奥の暗がり消えて、見えなくなる。

良い夢を、と彼もまた思う。あくびを押さえながら、同僚の男を起こさなくてはと思う。